

関島寿子 インタビュー

2021年6月10日 日日（京都）にて

関島寿子 バスケットリー展

会期：2021年7月2日（金）－7月19日（月）

場所：日日gallery nichinichi（京都）

HP：https://nichinichi.com/exhibition?t=47_sekijima_210702&r=e

ビューイングルーム（展示会作品）：https://nichinichi.com/works?t=47_sekijima_210702

Instagram：https://www.instagram.com/gallery_nichinichi/

ギャラリートーク 2021年7月10日（土）非公開オンライン開催

「創作された枝－関島寿子の考える手」

対談：関島寿子さん、上羽陽子さん（国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授）

YouTube上にて録画映像を一般公開中 [https://www.youtube.com/channel/](https://www.youtube.com/channel/UC4HN0ntDDGZfl2SQMOZHKoA/)

UC4HN0ntDDGZfl2SQMOZHKoA/

このインタビュー記事は上記展示会の開催に伴い、関島寿子さんにお伺いした記録です。

（編集：日日 小牧真理）

日日：まずはじめに、15年程前にNYの美術館で新聞紙で編んだかごの作品をみて、これはどういうものなんだろうと思いました。現代美術や彫刻が展示されている中で、なぜ新聞紙で編んだかごが展示されているのか、理解できなかったのです。しかし、よく見ると編むことで浮かび上がる女性のユーモアのある顔が面白くて、衝撃を受けました。そのことは実はすっかり忘れていたのですが、関島さんの著書「バスケットリーの定式」を読んだ時に、エド・ロスバックの新聞紙の作品を見て、同じものだと記憶が蘇り驚いています。



エド・ロスバックの新聞紙のかご

関島：まずロスバックの話がでたのでそこから話を1しましょうか。工芸の定義は人それぞれなんです。絵画も彫刻も、そうして現代に至ってます。

工芸のほうからきた造形は、定義をどう作るのが主で、再定義するとか、そこがはじめにあります。そのことと材料についてどう考えるかというのが基本的に含まれています。ロスバックと私は構造についての考えは違うわけではないけど、材料に対する考えは、ロスバックは、現代都市のある種70年代の代表的な価値観ではあるけれども、都会の廃材とかそういうもので表現するのをあえて押し出したんです。もともと、かごは自然の材料でつくるのが一般的でしたが、よくみるとそれは単に自然が身の回りにあったからみんな使ってきたわけです。自然が周りになく



作品の箱を積み上げた上に作品「固形」を展示した様子

なってきた現代では、都会にある身の回りにある環境を利用したわけで、それ自体は逸脱した素材の選び方ではないわけです。そう考えたロスバックは、新聞紙とか梱包材とか、廃物を都会にある自然環境（身の回りにあるもの）として使っていたのです。

そういう態度は70年代は一般的ではなかったけれど、説得力があり、新聞紙の作品を初めてみた時、私もすごいと思いました。それは私の美意識、好み、感覚的なものとしては木の皮のほうが、断然好きだけでも、思想として材料をどう見るかというのはよく理解できました。特殊なものではなく、表現活動としては、（新聞紙や廃材を使うのは）自然なことだと思って、カゴに馴染むものとしてとても敬意を払い、たくさんそこから学びました。

特にあれがおもしろいのは新聞紙だということです。織物の縦糸と横糸みたいな、行と段があり、そこに印刷物、構造がはいってくる。その平面が立体になる時、ダーツが入ったり、ギャザーがあったり、重ね合わせたり、折り曲げたりして平面が角度をもつと、形がはっきりあらわれておもしろい。それにともない、大きな女の人の顔が 立体化した時の組み合わせにより、モジリアーニみたいに細長い顔になるとか、どこかだけがズームアップされたり変化が面白い。それは絵を描く人がどこか一部を抽象化するのと似てますね。かごが特殊なものではないというか、表現の普通の要素をいっぱい含むことができる、それをギャラリーに展示されているものをみて自分で理解しました。だれも解説してくれないから、どういう文脈であるとかきく機会もなかったんです。そもそも文脈もできてなかった。それをつくってきた中心に第一世代のロスバックがいたんです。

日日：半世紀たって、その間、バスケットリーというものの文脈はどんな風が変わってきたと内側から見て感じてますか？

関島：すごく変わったと思います。はじめて75年にアメリカに行って、その頃は、ロスバックにしろ、マックイーンにしろ、非常に多くが原理の再定義みたいな考え方が押し出されていました。ですから、わかりやすかった。その後たくさんの人が参入するようになり、原理の再定義をすること自体が、第一世代で済んでしまったから、する余地がないと思ったひとがいて、ほかに興味をもちました。例えば、巻き上げるといふ技法なら、その巻き上げるといふ技法が何を意味するかといふことを問うことはなく、あるものとして受け入れて、巻くという技術によって材料のバリエーションを模様とか、装飾などを中心に考える人が次から次へとでてきたのです。

テーマも工芸の概念を問うようなことのほかに、物語を語るとか、ナラティブという言い方とかあるんですけど、自分のうちにあるストーリーを紡ぎ出すというのが、どんどんでてきた。それは絵画でも彫刻でも、ありましたよね。それこそが表現のテーマだという伝統があるので、たちまちその方に流れがいった。90年代、今もその流れです。しかし、ある時期からミニマルな作品であると言われた。ミニマルといわれると中身がないみたいな、スカスカしたものみたいな悪口いわれているみたいだけど、模様をつくるとか、どんなイメージを紡ぎ出すのをあえて避けるようにしました。

日日：素材を多様化したり、装飾性を高めることで、強いものが生まれることは、どの分野にもみられることですが、関島さんは素材も変えませんでしたね。そこは、やはり変えてはだめだと思ったのでしょうか？それとも興味がなかったんですか？

関島：人がやってるのがだめという反応とも違うけれど、私は自分の考え方とか、材料、形、技術に対する考え方というのを突き詰める方法を見つけた時、やることが山のようにあったわけなんです。

同じクルミの皮だって、10年前の使い方と今の使い方とは違うわけです。考えが変わると材料は、この材料で同じだけどこまで違う考えを表せるということがわかってくると、むしろ変えない方が自分の考えが変わったことがはっきりでるとか。そういうふうを考えるようになったのです。それは金属使ってみたいと思ったりもするけれども、それはいつでもできる、誰でもする、とは思いませんね。



クルミの粗い素材感

日日：素材の問題点を逆にテーマにするという、深く素材の性格をあちこちから試して、形化しているというのは作品にもでています。例えば、今回「複線の意味」というシリーズがありますね。80%、60%、50%とありますけれども、2つ聞きたいのですが、これは、50%からはじまって、60%、80%もありうるという連続性として生まれたのか？はじめからきめていたのか？同じ素材を違うように使っているようにみえますが、しろぽくみえてる、黒っぽくみえていたりしますがそのあたりははじめから使い方も決めていたのですか？



「線の意味」 ジャスミン・ヤナギ

関島：「複線の意味」というタイトルの作品のまえに、「線の意味」というタイトルの作品があります。そこからまずはじまるのですが、線があるというのは、見た目に線がおもしろいというのは、結果なんです。その線というのは、その材料、形をつくるのに、どうしてもその線がないと、その形がつかれないという線なんです。その線には、技術上の意味、役目がある。それが線の意味。それがたまたま、形態の重要な様相になっているのです。

これを作るときに、梁に使うような太い角材を型にしていて、その上にジャスミンを編みつけて、乾いた時に型をぬく。ぬくというのは、かごは編めていて、木の型をぬくとい

うのは、なにかしないとぬけないので、線のところで右のカゴと左のカゴと分けて作っています。右側と左側がループのように重なっている。右側の要素は右側をぐるぐるして左にはいかない。ある程度形ができたときに、太い柳の枝をぬくんです。そうすると蝶番がぬけたみたいに、ループが重なっていたところがひらく。そうするとカゴが右左に分かれて、型がぬける。再構築するときに、蝶番の芯をいれるみたいに、柳の棒をもういちど、ループのところに差し込んで一体化する。空洞化した形ができる。その後、補強するためにさらに編みます。それが「線の意味」です。

型の上に作ったものをこわして、型はこわさないわけなので、一つの型は何回も使えるわけです。だから同じ形をいくつも作れます。次の「複線の意味」というのは、線が2本ある。そうすると、さっきは、柳の太い枝、まっすぐな棒を一旦ぬいてからしてたけれども、今度は複線の右の線、左

の線からかごを右と左に分けて作っておけば、パツと割れるじゃないですか。それと同時にまたちがう趣がある。柳の1本の線の意味から、ダブルの複線の意味が生まれたのです。アウトラインをしっかりとった構造、境界線を共有しているのと、はじめからわけているものの違いです。

「複線の意味」の時は、その二つの線のありかをどの比率でうごかしたら面白さがあるか、考えるようになりました。真ん中はあとからやっと思います。60%からはじめて、真ん中にして、もっと寄せたらと思って80%にしたかどうかと思いました。

白く見えるのと見えないとというのは、皮をむいた裏側をつかっているけど、あまり気にしていない。意図したというより、たまたまそうっただけです。これは水平でもできるし、斜めに分割できるかもしれないし、線というのはそういう意味をもつことがあるということを初めて試したので、そういう題がついているんです。



「複線の意味」
上から50%、60%、80%

日日：形をつくりながら色々探索しているわけですね、空間とか一つ一つの要素、ボリューム、比重。作っている人が一番楽しいですね。

関島：作る人というのは、楽しいところがどこか見つけた人なんですよ。見つけると長いことやっ
ていても、他の人から見ると変わっているといわれるけど、そういうことはないんです。
いろんなことが見つかり出すと、線の移動も、単にデザイン上で移動してるのでないというのを自
分が知っているので、できたものをみた人が批評するのは、バランスだとかなんだとかいって終
わりだけれども、私にとってはもう少し違うその前の理由がある。なるべく作品の題というのは
正直に、隠さずに題をあえてつけています。ぜったいに何かのイメージということに騙すというか
煙に巻くことはさけています。



「たたんだ角」

「たたんだ角」は、たたむというのは、着物をたたむとか、包装紙をたたむとか、角って一体何？というのがテーマで、はじめからかごでは角を包むというのは普通なんです。ところがたたんだ角の場合は帯みたいなまっすぐなものをつくって立体にあわせるとき、包装紙で箱の角をつつむとき、その部分は折り曲げてつくるじゃないですか。あれと同じことをここでやっているんです。帯自体はこの幅なんです。型の周りを何周も移動しているのです。

「組まれた角」というのは、はじめから、三つ巴に組んでいて、どの角にもおこっている。たてとよこ、斜めでできています。はじめから角ができるように組んであるのです。さっきは、平だったもので角をつくっていつているのです。「組まれた角」は、角がいくつもあるけど、上の角がある場所が移動している。組んだ角を移



「組まれた角」

動させている。組む場所は変えられるということです。

日日：30年後関島さんの建物ができてそう。香港にありそうなイメージですね。

関島：形、立体、空間というものに対して、典型的なイメージをもっているけど、大きくなっても気持ちよさそうですね。北京のオリンピックスタジアム鳥の巣は、カゴ仲間の間では、我々からデザイン盗んだなといっていました。伊東豊雄さんとか隈さんとかバツバツの構造体、流行っているけど、カゴ的よねって。少しの材料で空間をささえることができる。カゴは小さな建築物であるという考えをずっともっています。



「なわの記録Ⅶ」

「なわの記録Ⅶ」は縄ってというのは、なにかをするための準備のものです。縛ったりするためにもともとはつくられたものですが、なわ自体が形をもったらどうなるのかというところからスタートしました。例えば、雑貨屋さんで、藁縄がとぐろまいていたり、まきとられている糸とか、準備としてのものがものすごく美しいと思いました。それを表現したいと思ったわけです。

「なわの記録」のシリーズでは、何日も縄を縛うという同じことを続けていて、そのあいだ数えているんですよ。10捻じったら、印つけるとか。お香を燃やして、時間測るとか昔からあった時間を記録しているものです。

空間とかではなく、なわというものがそれ自体どういう形をもつかをみたい。そうすると、縊りをかけるとかならずどちらかにねじれていく、全体の形を支配していく。それが途中で向きを考えたらどうなるとおもったのが、「なわの記録Ⅶ」です。

それには、結び目がみえるでしょう。結び目から縊りの向きがかわってるんです。ただ縊りのむきをかえたらほどけちゃうでしょ？ だけど右縊りを、10回やって結び瘤をいれて、左縊りを10回やったら解けるから結び目をつくる。何回よじったら結び目と記録しているわけです。なわをつくる動作の、記録性というのがテーマです。



「なわの記録Ⅷ」

「なわの記録Ⅷ」は、藍の紐と赤い紐がついているのは、何回かねじったら、青い布裂を挟んで印をつけ、100回いったら赤をつけるという風にしてます。形はまきとっているシンプルにしておきたい。何かに見えたくないです。実際には少し空洞があって、かごのように立つことができます。なわで記録をするというのは、縄張りの大きさををはかるためにとか、なわというのは測る道具だったのです。船のノットというのがあり、なわの結び目がどのくらいのスピードで海に流れているのか測る。沖縄のわら算は、そろばんみたいに計算するか、インカ帝国の税金の記録とか、結び目がいくつたまるとより大きな結び目になって、桁があがっていく等、縄をつかった記録の例が色々ある。長年この仕事をしていると、そういう話があちこちが集まって、それらをは私の表現にどう生かせるかと思って、常日頃考えています。形が生まれる経路はいくつもあります。

スパゲティを茹でても、普通のことでいいし、梱包しているとき、なわが振れてイライラするとか、効率が悪いですね。何かしているたびにカゴのことを考えています。なので、工房にすわってデザインするとかそういうことはしないです。デザインは常日頃考えていることを形に落とし込む、そういうふうにしてやっています。

日日：一つの作品ができるまでどのくらい時間がかかるのでしょうか？

関島：作品ができるまでの時間は、ものによります。何十年も思いつかないこともあります。形は思いつくけれども、それをさせてくれる材料がでてくるまで待っています。または手元にある材料の性質を変えれば適した材料になるということがわかるのに何年もかかったりとか。他のものを作っているなかで、考え方がわかって、その材料をこう使えばできるということにたどり着くこともあったり、たちどころに見つかることもあります。

ありがとうございました。

展示会会場風景

